

## 次の見通しを持ちながら、 活動に集中して取り組む生徒をめざして

宮 脇 一 善

はじめに

Q男は、公立の小学校に第2学年まで在籍していたが、その後本校に入学し、10年が過ぎようとしている。いよいよ社会参加を目前に控えた今、Q男の課題を再度検討し直し、これからの日常生活が、より楽しく充実したものとなるよう実践を重ねてきた。

Q男は、出生時の後頭部髄膜瘤、水頭症によるひきつけ、脳波異常、精神発達遅滞などの障害が見受けられる。また、一昨年8月にシャント入れ換え手術をしており、運動制限もあるし、頭部を衝撃を与えないように細心の注意を要する。

このような条件のなか、特にQ男の課題として、集団生活のなかで求められる自制心、そして、周囲との望ましいコミュニケーションの持ち方が挙げられる。これらを克服していく支援として、今の活動を十分に保障し、満足感や成就感を持つこと、そして、次の活動への期待感を常に意識できるように努めていった。この積み重ねが、自制心の高まりや、ひいては望ましい人との関わり方・コミュニケーションの在り方に有効であった。その経過を述べてみたい。

### 1 プロフィール

#### (1) 生育歴

- ・昭和55年 2月 9日生 18歳 0か月 高等部 3年 男子 ・水頭症後遺症
- ・平成 7年 4月 本校中学部より入学

#### (2) 諸検査による実態

- ・知能検査 WISC-R IQ 測定困難 表-6 S-M社会生活能力検査

田中ビネー式 MA 2歳3か月

- ・S-M社会生活能力検査 SA 4歳7か月

身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
6-6	3-9	4-5	4-3	3-7	5-0

#### (3) 行動特性

- ・言語による人とのコミュニケーションが難しい。しかし、人と関わりたいという思いは強く、人に触れたり、ぶつかったり、大きなうなり声を出したりして、相手の反応を楽しむ。
- ・集団を自分なりに意識し、集団から外れることを好まない。
- ・興味を持った活動、自分にできそうな活動には没頭することが多い。
- ・基本的な生活習慣は、定着までに時間がかかるが、一度身につけば継続する。
- ・次の活動を常に期待し、「次は何？その次は？」という問いかけをする。
- ・カラオケで歌うのを好み、そのときの順番待ちや時間を守ろうとする自制心が芽生えつつある。

## 2 取り組みの構想

### (1) 指導仮説

Q男の行動特性のなかで問題となるのが、集団生活のなかで求められる自制心と、望ましい人との関わり方・コミュニケーションの持ち方である。その解決の糸口を行動特性に求めてみると、興味を持ちそうな活動、Q男にできそうな活動を十分に確保・保障し、満足感や成就感を持たせること、そして、次の活動への見通しや期待感を持たせることも重要な要素となる。

次の見通しを持ちながら活動に集中して取り組むことにより、満足感や成就感を得ていく過程のなかで、自制心の高まりや、望ましい人との関わり方・コミュニケーションの在り方を求めていくことができると思われる。

### (2) 指導方針

- ・次の活動を期待しながらも、今の活動を大切にすることで、満足感や成就感を持てるようにする。
- ・集中して学習しているなかにあっても、集団生活のきまりや集団のなかの一員としての意識を促す。
- ・思いを生かすためには、集団を意識しなければならないという場面を意図的につくる。

### (3) 具体的な手だて

- ・「次は何？その次は？」という問いかけに対して、一日の見通しを伝えるとともに、常に次の活動への期待感に結びつく、興味を持ちそうな活動、できそうな学習活動を確保する。
- ・「朝の会」の司会を、一日の初めの活動として位置づけ、集団の中の一員であるという意識を促しながら、望ましい友だちとの関わり・コミュニケーションづくりの場としていく。
- ・楽しみにしているホームルーム活動(主として集会活動)の内容や運営のなかに、彼の思いを引き出し、盛り込んでいく。
- ・休憩、給食、掃除時間なども含め、一日を通して、友だちとの望ましい関わりを意図的に設定するとともに、安全にも十分配慮する。

## 3 指導の実際

### (1) 職業科 校内職業実習

5月、10月、2月の年 3回の実習が、一週間を目安に実施されている。写真は、5月に実施された校内職業実習で、「コアならべ」をしているようすである。

この時のQ男の目標は、

- 一日中、同じ調子ではたらく。
- コアをこわさない。



「コアならべ」に取り組むQ男

であり、これまでの実習での課題をもとに、教師とともに決めたものである。その日の気

分で、おしゃべりが多く実習の雰囲気壊してしまったり、作業の手が止まってしまったり、時にはコアを握り壊してしまったりするという実態があった。

そこで、この実態を改善するため、次のような、見通しを持ち易く、活動が確保できるような支援を工夫した。

- ・一箱ならべ終わるごとに、手作りのマグネット式自己評価シール ⊙(「せっちゃん」と呼んだ)を渡し、自分の手で真向かいのボードに貼り、励みや目標、見通しを持ち易いようにした。
- ・その日の調子(時間帯によっても)に合わせてコアの種類を選択し、作業の手が止まらないようにした。
- ・「次は何?」という問いかけに、中間休憩、昼休憩、作業の終わりまでの見通しを、「時間」で認知させようとするのではなく、作業の状況を判断して、箱の数や「せっちゃん ⊙」の数で知らせるようにした。
- ・保護者(特に、母親)との連携を大切にし、毎日のようすを伝え、家庭での話題にしてもらい、励ましの言葉をかけて送り出してもらえるようにした。

これらの支援の結果、この実習中、次の見通しを尋ねる以外に発する言葉は少なくなり、ちらっと「せっちゃん ⊙」を見ては作業をする姿が続いた。コアを故意に壊すことも無くなった。Q男には、見通しを知らせ、自分に取り組める作業が保障されれば、働いた後の充実感・満足感も得られるものと思われる。その評価の一つとして、6月に実施された、S作業所での現場実習のようすが挙げられる。以前から同じ作業所で現場実習をしていたQ男は、作業の雰囲気を壊してしまったり、所生さんとのトラブルがあったりして、付き添いが必要であったが、今回の現場実習では、校内作業実習と同じ落ち着きが見られ、付き添いをほぼ要しないという評価をいただいた。

Q男の「行動特性」の一つである、「定着までに時間がかかるが、一度身につけば継続する」という特性が、作業面で実を結んできた実態から、10月の校内職業実習では、紙工作業をQ男の苦手な立ち作業で行うことにした。体力との勝負でもあったが、支援を得ながら、一度も座り込むことなく実習を終えた。苦手な作業であっただけに、満足感・成成感は大きかったろうと思われる。

## (2) ホームルーム活動(野球大会を通して)

ホームルーム活動のなかに位置づけられる集会活動は、生徒たちにとって楽しみながら集団としての高まりを得ることのできる活動であり、「バスケット大会」、「野外散策」など、8名の生徒一人ひとりが担当し、定期的に計画を立て実施してきている。

10月にはQ男が、大好きなスポーツである「野球」を計画した。ふだん、運動制限があり、また、絶対に頭部に大きな衝撃を与えてはならないQ男にとって、いつでも簡単にできることではなく、この機会に、クラス



プロ選手になりきっているQ男

のみんなと楽しんで満足して欲しいという教師の意図もあった。そして自らが中心となって計画し、実施していくなかで、自他ともに満足感や成就感を味わい、ひいては、Q男の課題である「望ましい友だちとの関わり方、コミュニケーションの持ち方」への一助としたいという願いも込めた。

経験上、Q男にとって野球とは、「投げる」「打つ」ことであり、「取る」「走る」といった動作を含めた野球そのものの認識は薄い。したがって、Q男を中心とした野球大会へ向けての話し合いも、Q男の簡単な質問を中心にして、他の生徒の「野球」についての認識を手がかりにルールや方法を決めていけるよう、支援していった。

#### ○野球大会へ向けての話し合いの内容（太字がQ男の発問、・印が生徒の反応）

「今度、野球大会をします。2つのチームを作ってください。」

- ・チームの名前を決めよう（巨人の星、ヤクルトスワローズに決定）
- ・キャプテンを決めよう（C子、N男に決定）
- ・打つ順番を決めよう

「三角ベースがいいですか、四角ベースがいいですか。」（教師が図を示す）

- ・三角ベースがいい（人数が少ないので教師に参加を求め、
- ・四角ベースがいい 多数決で四角ベースに決定）
- ・守る場所を決めよう（5人で、ピッチャー、キャッチャー、1塁手、2塁手、3塁手を決める）

「審判は誰がいいですか。」

- ・先生にしてもらおう（教師より、使う用具と簡単なルールの確認）

いくつかの発問をQ男との間に準備しておき、どう話し合いを進めていけばよいかを確認した。そして当日は、準備していた発問を、話し合いの流れに応じてつないでいくように促した。Q男は、大好きな野球が、クラスのみなどできるように、自分がその主体者となって話し合っているという実感を持たせたようである。

#### <野球大会のようす>

午後の野球大会のため、Q男と数人の生徒とで、昼休憩に準備をした。きれいなダイヤモンドが描けるよう、予めつけておいたポイントを目がけて、Q男とラインを引いた。準備が終わる頃には、Q男はすでにキャッチャーマスクとミットを身につけ、ボールを握っていた。他の生徒も、きれいに引かれたダイヤモンドを見て驚いていた。試合が始まって生徒の実態が見え始めてくると、審判の適切なルールの設定のもとに、絶え間無い歓声が鳴り続いた。そして、大会終了後、Q男は自分のチームが勝ったにもかかわらず、「おわった。」とさびしそうに呟いた。この呟きを、主体者としてQ男なりに規律を持って進め、大会を終えられた後に得られた成就感として捉えた。

#### 4 反省と今後の課題

5月の校内職業実習のあたりから、Q男は少しずつ変容(自制心の高まり)が見られるようになり、落ち着いた態度で学校生活が送れるようになってきている。卒業後も、Q男に理解を持って接する支援者に恵まれ、さらなる集団生活の規律を身につけていって欲しい。

満足感や成就感を味わいながら、集団生活のなかでの自制心の高まりや、望ましい人との関わり方・コミュニケーションの持ち方を感じ取りながら生きる姿を望みたい。